

武者小路房子の場合



阪田寛夫

新潮社

武者小路房子の場舎

阪田寛夫



新潮社

武者小路房子の場合 むしやこうじふさこ ばあい

一九九一年九月二五日発行

著者 阪田寛夫 さかた かんお

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—33266—51—1

（編集部） 03—33266—54—1

振替 東京四一八〇八

印刷 三晃印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります



© Hiroo Sakata 1991,
Printed in Japan

71.600 -

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-360403-4 C0093

武者小路房子の場合

正直に言つて、彼女にここまで引廻されるとは思わなかった。それが今の感想だ。

つい三年前の初秋、宮崎市から車で三時間走った峠の下り道に、突然全貌をあらわした「村」を俯瞰した時は、蛇行する小丸川に三方を囲まれたその小台地のどこかに、彼女がまだ住んでいようとは思ひもよらなかつた。彼女の前夫、武者小路実篤と、夫人安子が相次いで亡くなって十一年経っていた。実篤と同志たちが、ちょうど七十年前に創めた「新しき村」が、まだこうして創成の地に生き残っていることさえ、私は数日前にやっと確かめたばかりだった。

宮崎県児湯郡木城村石河内字城が往時の地名で、今は木城町石河内。雑誌『白樺』の中心人物武者小路実篤が千葉県我孫子の自宅を手放してこの地を手に入れた頃は、最後の三里の山道は荷車さえ通れず、丸木の一本橋や、雨が降ると膝までぬかるつづら折りの嶮路を、荷物をかついで迎るほかなかつた。理想は高かつたが全くあてもなしに、どうでも日向に土地を求めると、実篤が作家木村莊太ほか二名の同志を伴なつて、宮崎県に入つたのが大正七年十月初めだ。当初、

霧島の奥の小林盆地を毎日十里も空しく歩き廻り、そこは諦めて一たん東海岸に出て、県中央部を日向灘にそそぐ一ッ瀬川や小丸川上流に分け入った。そしてある日、けわしい峠を登りつめて、つづら折りの坂を降りる途中、豁然とひらけた視界の底に、彎曲する清流に洗われた、山の中の半島のような台地を発見した。まさしく俗界から隔離された別天地で、実篤によれば、

「ぶつかる所にぶつかつたやうな気がした」
のだった。

それから七十年経っているが、車が同じ地点を通りかかった時、私もまた息を呑んだ。見入らずにはおられない、美しい眺めだった。そこに実篤の詩碑があった。

山と山とが讃嘆しあうように

星と星とが讃嘆しあうように

人間と人間とが讃嘆しあいたいものだ

ただしせっかくの景勝が、実はひどい痩せ地だった。おまけに、農地としては致命的に水がなかった。逆に大雨が降ると忽ち川の水嵩が増して、対岸の集落への渡し舟が使えなくなった。まだダムのない時代で、背後は峻しい山だから、文字通り陸の孤島と化す。以上の欠陥はすべて、入植してみて初めて分った。土地探しに来た人の中に、農業の経験者は一人もいなかったのだ。しかも、彼らの感激の表明があまりに卒直だから、地主には足もとを見られて、最初の心積りの二倍半の値段を吹きかけられた。やっと双方の中値を取って契約に漕ぎつけた時は、それでも一同万歳を叫び、肩を抱いては祝福しあったという。実篤の忠実な書生川島伝吉は、少年時代に文

学に憧れ、百姓仕事を嫌って家を飛び出した人だが、この青年ただ一人が経験者で、あとは素人百姓による村の開拓史が、ここから始まった。この章では以下、日向の「村」の略史を述べる。

『新しき村五十年』（永見七郎編）によると、会員の出入りは頻繁で常ならずだが、最初の二十年間を通じて、「村」に住みこんで働く「兄弟姉妹」は、常時二、三十人はいた。彼らは先ず、買付けた古材を川向うから運んで宿舎を建て、瘦せ地を少しずつ開墾して田畠をひろげた。もちろん電灯はない。何里も上流から素掘りの水路を引いたのが五年目。蟹に穴を掘られて水洩れのひどい土溝を何とか改修できて、相当量の稲作が可能になったのが十一年目。やっと飯米は買わずに済むようになったのが十五、六年目だから、実篤の説く、「人類の意志に叶った」個人を生かす生産共同体に共鳴して各地から加わった延べ何百人かの「兄弟姉妹」の暮らしも、実は外部からの寄附金以外は、実篤の印税・原稿料に頼るほかなかった。ところが関東大震災を境に漸減したその印税が、大正末から昭和へかけての新しい文学の勃興で、さらに一時期の半分以下に減り、たびたび村の経済危機が訴えられた。危機は昭和十年代に、「村」の主力が日向を引き上げるまでつきまとい、たとえば昭和十三年三月の実篤から志賀直哉あて借金依頼の手紙には、昭和七年から十二年度までの村税滞納金の督促状が同封されるような状態だった。それでも二十年目（昭和十二年）、ようやく麦・茶・果樹の生産が緒についた矢先に戦争が始まった。その翌年、国策のダム工事の施行が決められて、せっかく拓いた水田のうち一ヘクタールと住宅の何軒かが水没することになった。

実篤は最初の妻である房子と別れてのち、大正十四年末には新しい妻と長女、次女を連れて村を出て、奈良を経て東京に戻っていた。それでも、執筆に専念しながら「村」の経済的、精神的な支柱であり続けてきたのだが、ダム工事を機に三千円の補償金で奥武蔵野の原野に土地を買い、「村」の主体を埼玉県毛呂山に移した。戦争は一層激化し、会員は減り、食糧供出の戦時経済体制に組み入れられた「村」は、独自の存立もままならなくなったが、その期間も日向に杉山という一族だけが残っていた。以上は主として「村」の公的な歴史からの要約である。

こんど日向の村を訪ねるに当って、私の願いは、せめてその杉山家が廃村の一面にでも残っていてほしい、もはや初代の入植者の生存は時間的に無理だろうが、もし杉山家の子孫に逢えて、昔話でも聞かせて貰えれば望外の喜び、というほどのものだった。前述の略史『新しき村五十年』（昭和四十三年）の、年度ごとの居住者一覧では、日向の村における「杉山家族」の存在が、昭和三十六年度まで記録されていた。

数年前私はふとした成行きから、「新しき村」創立前夜の様子を克明に記した無名詩人の日記を読む機会を得た。

詩人の名は宮崎丈二と言った。画家でもあったが、昭和四十五年に亡くなっている。その人の日記を、未亡人から借り受けて読むうち、何冊目かに思いがけず、「新しき村」が出てきた。そこには実篤を慕って集る若い同志たちの昂奮のほてりや、小さないざこざが、ほどよい距離を置いた筆致で書きとめられていた。お蔭で、それまではミレーの「晩鐘」や「種蒔く人」に出てく

るような人物たちの、禁欲的なハイカラ村、くらいに片付けてきた「新しき村」が、還暦を過ぎた私の前に俄かに人間臭く立ち現れた。

最初の記述は、大正七年五月二日だ。すでに二年続けて一高受験に失敗した宮崎丈二が、気の重い三度目の試験をあと二ヵ月余りに控えたその日、神田の書店で買った雑誌『白樺』で、「新しき生活に入る道」という武者小路のエッセイ（のち改題して「新しき村に就ての第二の対話」）を読んだ。丈二は、

「ほんたうに皆が愛し合つてたのしく働くことが出来、各々好む所に従つてその個性を益々發揮させていつたらどんなにいいことだらうと思ふ」

と感想を書き、自分も「理想的の村」の会員に入れてもらつて、早くその実行にとりかかりたい、と思った。ただし、——横道に逸れるが、この年二十一歳の宮崎が空想した理想の村には、若い男女が共同生活の中で自由平等に愛を共有できる場所、という期待も色濃く混ざっていた。私生活で失恋を繰返していた宮崎丈二は日記に、その「村」では財産と同じように「性の共有を空想せずには居られない」と記し、なお、

「他人に迷惑をかけなければ和姦もあるていど許されさうだが、人間同志だから性欲を充たしてしまへばそれで平気でゐられることが出来ないやうな気がする」

と、先走つた心配までつけ加えていた。宮崎のみならず、同じく草創期に馳せ参じた青年の一人萩原中などは、日向の「村」でさっそく女性に構いすぎて糾弾された。そこには前年にロシア革命で実現した共産社会における男女関係についての、誇大な噂の影響も無視できないと思わ

れる。

一方、実篤は、「村」の仲間の性の問題は「恥を知ること」及び「内氣」で円滑に行くのだと、甚だ樂觀的であった。まさかそれが他日我が身の上に及ぼうとは、考えてもいなかった。もちろん、まだこの時「新しき村」は実篤の頭の中にしか存在しない。そして存在もせぬ「村」に対する主に左翼の人たちからの階級的批判が新聞に載ると、丈二は「本当のことを知りもしないで」と、口惜しがった。その間に、最初の共鳴者木村莊太はじめ十名の若い同志が六月に会合を開き、「村」は一気に走りだした。

横道に逸れついでに、「新しき村」前史を宮崎日記によって垣間見ると、もともと実篤の崇拜者だった大正の芸術青年宮崎丈二が、初めて「新しき村」の本部を訪ねたのは、三度目の受験も落第したのちの、大正七年九月十一日だった。本部と言っても、駒込動坂あたりの小さな二階家を実篤が借りて、若者の溜まり場にしたのだが、丈二をそこへ連れて行ったのは萩原中だった。萩原は工員で、二歳上の丈二を慕ってかねて飯田町の宮崎の家に出入りして理想の村の話聞かされ、早くも七月から「村」の例会に出かけて、結構いい顔になっていた。

九月十四日、丈二は東大基督教青年会館で開かれた「村」の演説会の切符もぎりをつとめ、実篤の演説に打たれて、「安心して何でもまかせることのできる方だ」と、涙ながらに思った。そして翌日、それが白樺派の人たちによる実篤の送別会とも知らず、「村」の仲間に誘われるままに我孫子あびこの手賀沼を見下ろす武者小路邸を訪ね、『白樺』同人の柳宗悦、岸田劉生、長与善郎、児島喜久雄、客分の詩人千家元麿ら錚々たる連中と同席して「こんなことが有り得るだらうか」

と感激した。その上、思いがけず実篤から、

「宮崎君」

と声をかけられた。

そこまで日記を読み進めてきた私は、この一声を宮崎と一緒に、思わず息を詰めて聞いたのだ。
った。

ただし、丈二はこうして「村」の入口まで来ながら、結局中へは飛びこめなかった。その後も煮えきらぬ自分に焦立ちながら、遠くから「村」の行くてに思いを馳せ、機関誌に詩を載せるていどの付き合いに終り、「村外会員」からも、やがては脱落したが、その宮崎丈二が一度も訪れぬままに終った現地を、折があれば代って一目見ておきたいと、私は時にふれて思うようになった。

そのまま一、二年過ぎすうち、たまたま宮崎市へ行く用事ができた。その打合せの電話があった時に思い出して、先方のテレビ局の人に村の存否を訊ねてみたら、

「ありますよ、ちゃんと」

と笑われた。そこへ行く交通機関や、所要時間を重ねて尋ねているうちに、親切な相手は、私を案内する人までも紹介してくれて、いやおうなしに「村」を訪ねる運びとなったわけだ。

かつてひどく瘦せた畠と雑木林だった「村」の台地には山吹色の稲穂が稔っていた。

「農薬を使わないから、本当に山吹色なんです」

と、迎えてくれた作業衣に半長靴の、若々しい松田理事長が言った。ここは昭和三十八年（埼玉の「村」は二十三年）に財団法人化された由だ。埼玉から十年前に夫婦で移ってきて、この地域の無農薬農法の指導者になってしまったという理事長は、田畠のある上の城、昔は「村」のテニスコート兼お祭広場だった中の城、更に下って、さっき峠道から無数の繭玉が光って浮かんではいるように見えた、鷺鳥のいる水辺の下之城と、一わたり案内して、この面積が現在の二家族の経営規模にふさわしく、一番多い時は五十人もの「兄弟姉妹」の百本の箸を、実篤が筆一本で支えたことがどんなに大変だったかを、納得させてくれた。

「房子さんに逢いますか？」

と聞かれたのは、そのあとだった。ただし、彼女は気むずかしく、虫の居所が悪いと絶対に逢ってくれないんだという。「それはまさか、前夫人の……」、と聞きもならず躊躇っていると、宮崎市から一緒に来た二人も、呑みこんだ顔で、せっかくの機会だから逢うようお願いしてみても、

と勧めた。先ほどの気配で、何かこの「村」の奥の院に、気づまりな御本尊がいるらしいと感付いてはいたのだが、その正体はやはり「まさか」の、武者小路実篤前夫人だった。理事長が彼女に都合を聞いてくるまでの僅かな待ち時間に二人から急いでたしかめ、改めて緊張した。

「房子さん」は、途中出入りはあったものの、昭和十年頃から、戦中戦後を通じてずっとここに住みついて、今年九十五歳。いま宮崎では有名人だという。『新しき村五十年』に、「杉山家族」とだけ記されていたその杉山こそ彼女の再婚相手の姓だが、数年前に亡くなっており、子供も無いまま一人暮らしの筈。

——以上、耳新しい事実を一度に鵜呑みして慌てたり恥じたりしている間に、今しがた崖っぶちの木立に囲まれた平屋へ大股で歩み去った理事長が、同じ姿勢と歩調で戻ってきて、ひとこと、「逢うそうです」

と言った。理事長のすぐうしろに私、そのあとに宮崎からの案内者二人が、一列縦隊で続いた。一人は男性の国文学者、もう一人は女性の音楽家だ。軒端に小学校の時鐘のようなものを吊した平屋の、太い竹を柱に使った出入口から、時間のトンネルをくぐる思いで緊張して入って行くと、中は広い土間で案外明かるい。正面に張られた新しい床板に、素朴で頑丈で古色蒼然、一見して武者小路実篤愛用と思いたくなる手作りの腰かけ式書き物机が置かれ、その奥の雛段風の一段高い畳敷に、官女がしどけなく老いたような、ピンクのタオル地の寝巻をはだけた九十五歳の小さな「房子さん」が横坐りに坐っていた。それまで膝の上に拡げていた雑誌を、ものうげに脇に置いたのを見ると、当月号の『新潮』だった。自分のことをそこに書かれると知ってのデモンスト

レーションかと、いきなりぎょっとさせられた。まだそんな話は誰にもしていない筈だったのに。

作業衣の理事長が、首に巻いたタオルを外して、向かいの座敷のかまちに腰かけ、客人三名は板張りの床に、座蒲団を敷いて並んで坐った。彼女はいささか人を食ったように、鋭い目鼻を十分対象に向け切らないまま、元氣な理事長の来客紹介を受け流している。ぬるい風が入ってくる窓は、新しく取りつけたアルミ・サッシュだが、壁と柱に実篤の書や写真、ベートーベンのマスクなど、むかし村の青年男女が夕食後集って、実篤の話や、蓄音機の西洋音楽に耳を傾けた雰囲気がまだ漂っていた。

「今日は宮崎丈二さんのことを聞きたいんですって」

と紹介が終ると、やはり客の顔は見ないで、彼女は、

「みんな貧乏してました」と言った。

「千家元麿も宮崎くんも、そんなに、皆生きてないぞんすわ」

千家をセンゲと、由緒ありげにはつきり発音したことには感銘を受けたが、その千家のつけたりに名前を挙げた宮崎丈二については、それでおしまいだった。仕方がないから、こちらも理事長と同じような大声で、

「萩原中さんは、覚えておられますか」

と訊ねてみた。萩原は先発隊に加わって、房子とはほぼ同時に村に入った草分けの一人だから、

さすがに反応が違った。彼女が言うには、萩原がいつも蓬髪を肩まで伸ばしているのです、ある時、「うっとうしいじゃないかね、短くおしよ」

と文句をつけた。すると萩原が、

「恐れ入りました」

と、いきなり頭を下げた。そしたら油気のない頭のとっぺんに、台湾禿げが露われた。

「大きな、こんなおはげ」

と、彼女は両手の指で円を作ってみせ、

「それからこりごりしましたよ、めったなこと言うもんじゃない、と」

それが結論だった。『新しき村五十年』には、彼女がその萩原に「チャップリンさん」と綽名をつけてからかった、という文章が引用されていた。

「萩原中氏は、のちに共産党に入ったようですが」

と、水を向けたが、それには答えず、

「私も九十六だから、飲物は水ばかり。お茶も頂かない」

とつぜん、話を飛躍させた。九十六は数え年である。あとで理事長から聞いた解説によると、この人はすぐあんなことを言いだして、「村」で彼女がひどい目に会っているような印象を他人に与えたがる癖があるそうだった。扱い易いお婆さんでないことは、私にも分った。水から連想したのか、すぐに続けて、

「三町も歩かないと水がなくて、一升壺持ちちゃ朝と晩と水取りに行った」

と言った。こちらは七十年昔の話だった。後日読んだ平林英子の回想的作品「日向『新しき村』の思い出」（『新潮』昭和六十年八月号）には、大正十一年に「村」に入っただけの平林が、奉仕の気持で「先生の家の使い水」を、共同の風呂場の樋から桶に汲んで運んだ、とあった。手桶一杯の水は片手で提げるのは重くて、途中何度も休んだそうだった。房子の水運びは一升桶だが、彼女の思い出に残る労働だったようだ。当時の掘立小屋の風呂場は、木の丸い小さな風呂桶の外側に板を並べて、洗い場をつけただけの粗末なものだ。湯が沸くと当番が実篤の家へ一番先に知らせに行き、まだ明かるいうちに房子が洗面器を持って入浴した。長湯の房子は別格として、「兄弟」の妻たちの間で入浴の順番から時々もめごとが起った。そのてんまつを、実篤の文章で私も既に読んでいた。

口下手の私に代って、宮崎空港から同行した年輩の女流音楽家が、うまく話の穂をつないでくれた。その問いかけに、房子は卒直に、

「炊事は苦手。若い時はお肉が好きでした」

などと答えている。炊事係だった平林英子の記憶では、粗食が珍しくない時代のことだが、「村」の食事は毎度飯と野菜汁と漬物だけの殺風景なもので、たまにけんちん汁を作ろうとする、会計係の小屋へ出向いて、油を買う交渉から始めなければならなかった。肉好きの房子にはさぞ辛い日々だったろう。

だが、その辺で世馴れた音楽家が気分の切り換えをはかって、
「ご一緒に歌をうたいませんか？ うたいましょうよ」